

# 倒れていた認知症男性

# 警察保護せず死亡

昨年8月に横浜市で認知症の男性(当時85歳)が行方不明になり、東京都中野区で倒れているのを発見されたが、駆け付けた消防や警察は救急搬送や保護をせず、自決に死していったことが分かった。消防は「男性が搬送を辞退した」として現場を離れ、警察は「受け答えがしっかりしていて認知症の人とは思わなかった」という。認知症に詳しい専門家は「再発防止のため協議を」と呼び掛けている。(社会面に関連記事)

## 消防も搬送せず

消防庁や家族によると、男性が倒れているのが見つかったのは2014年8月19日夕、横浜市鶴見区のテイサビルス施設から行方不明に。野瀬の駅前交番の警察官もなし、家族は同日夜、神奈川県川崎署に駆け出した。21日午前10時20分ごろ、JR中野駅近くの路上で発見された。

消防が駆け付けたが、搬送を拒んだ。消防は「搬送の必要性を認めたが傷病者(男性)が辞退」との項目にチェックを入れた不搬送の同意書に、男性の署名を添えて現場を離れた。

## 「大丈夫と答えた」



一方、警察官に対して男性は氏名や年齢、住所は話さず、生年月日は「昭和28年2月28日」(実際は昭和8年2月4日)と答えたという。警察官は男性に水を飲ませ、「休憩できる安全な場所」と誘って約300メートル先の紅葉山公園に連れて行き、ベンチに座らせ、現場を離れた。

## 「大丈夫と答えた」

交番の警察官が駆け付けた。この男性が公園トイレの床で倒れていた。警察官が救急車を呼ぶかと尋ねると「大丈夫」と答え、「家は1ムベージュで持ち物や特徴がないんですか」と聞くと「け、奥元が判明した。男性の周囲で死亡しているのが見つかった。死因は脱水症と低栄養状態の疑い。奥元不明なままとして扱われ、家族が今年2月、横浜市の水

の問いにも「大丈夫」を繰り返し、後に分かるが実際には「字だけ通った店を営業、この時も警察官はそのまま現場を離れた。男性は23日朝、トイレ脇

は最初の発見時に正確な氏名を告げていたが、警察は「た人と推測した」という。警察は「認知症を訴え、死後にも家族が見つかるまで奥元を特定できなかった。警察は2カ月前の昨年6月、認知症の行方不明者の届出記録や保護に努めるよう通達したばかり。保護とは言い難いと思っただけで、今後には生かしたい」と話した。一方、中野消防署にも遺族の同意を得て取材を申し込んだが、同署は「個人情報は保護対象があり、第三者に話さない」として一切、応じていない。

再発防止へ協議を  
認知症の人の見守り活動に詳しい認知症介護研究・研修東京センターの永田久美子研究部長の話。救えるチャンスが幾度もあり残念でならない。当時の最高気温は連日35度に近く、発熱もあった。本人からは救急隊や警察官はどう見えたのか。声かけや目線の位置、周囲の仕方は本人が助けてと言いやすい対応だったのか。専門職や地域の人たちとは連携できなかったのか。この事実から具体的な学び、再発を防ぐためにそれぞれの地域で何ができるかを話し合おうべきだ。

【編集後記】 山田孝典